

高適の「塞上聽吹笛」詩について

岡 田 充 博

一

塞上聽吹笛

塞上にて吹笛を聴く

雪淨胡天牧馬還

雪淨く 胡天 馬を牧して還れば

月明羌笛戍樓間

月は明らかに 羌笛 戍樓の間

借問梅花何處落

借問す 梅花 何れの処よりか落つ

風吹一夜滿關山

風吹きて 一夜 關山に滿つ

右の七言絶句は、李攀龍『唐詩選』にも収められ、辺塞詩人高適の代表作の一つとして名高い作品である。

一首の大意は次のようになろう。「雪がきよらかに降りつもる胡地の空のもと、馬を追いたてて帰ると、明るい月の光のなか、羌笛の響きが物見やぐらのあたりから聞こえてくる。ちょっとお尋ねするが、この梅の花びらは、いったいどこから舞い落ちてくるのだろう。吹く風に一夜、国境の山々に満ちあふれる。」

「胡天」は、胡^この土地の空。「羌笛」は、西方チベット系の異民族の羌^{きやう}が吹く笛。「梅花」は、笛の曲「梅花落」にかけて用いられている。⁽²⁾ 国境の山々に響き渡る笛の調べを、梅の花びらになぞらえてこのように詠い、あわせて、それを降る雪にも喩えていると思われる。⁽³⁾ 「借問」の第三句の底には、「梅の木さえない辺境の地に、はて？」といった訝しさと、梅の花の咲く中国の地への郷愁とが織り込まれており、そうした重奏的な効果をねらった巧みな手法が、作品の後半を際立ったものに仕上げている。月明かりのもと、雪をいただく辺境の山々と、そこに吹きわたる羌笛の「梅花落」の調べ――。視覚的要素と聴覚的要素を見事に融合させた、この甘美な抒情世界は、名作と呼ばれるにふさわしい完成度を備えているといえよう。

ところで、実を言うとこの作品は、テキストによって異同が極めて大きいことでも知られる。今、私は『唐詩選』によって紹介する形をとったけれども、鑑賞の段階から一步踏み込んでみると、高適

の原作をどれと見なすか、字句の異同をどのように考えるか等々、意外に厄介な問題が付随していることがわかる。また、この詩の美しさは、後述するように高適の作品中では異質とも言え、そうした点も、字句の異同と絡めて検討が必要となってくる。小稿では、これらの問題について、私なりの視点から考察を加えてみることにしたい。

二

最初に字句の異同について確認しておくことにする。

この作品は、大きく三つの系統に分けることができる。具体的に挙げれば、①題名を「和王七度玉門關上吹笛」に作る『国秀集』系統、②題名を「塞上聞笛」に作る『河岳英靈集』系統、③「塞上聽吹笛」に作る『文苑英華』『高常侍集』系統、ということになり、先に『唐詩選』によって紹介した詩は、このうち③の系統に属する。先ず①について見てみよう。この系列の詩を収める文献で最も早いものは、盛唐の芮挺章の編になる『国秀集』であり、次のようにかなりの相違が見られる。

和王七度玉門關上吹笛 王七度が「玉門關上」に笛を吹く

に和す

胡人吹笛戍樓間 胡人 笛を吹く 戍樓の間
樓上蕭條海月閑 樓上 蕭條として 海月閑かなり
借問落梅凡幾曲 借問す 落梅 凡そ幾曲なりや

從風一夜滿關山 風に従いて 一夜 関山に満つ

題辭からするとこの詩は、王度（七は排行）という人物の作品「玉門關上吹笛」に唱和してうたわれたものであり、辺境に在っての作とは限らないことになる。なお、『全唐詩』卷二一四所収の詩もこの系列に属するが、題は「和王七玉門關聽吹笛」に作り、第二句の「海月閑」は「海月閑」とする。（台湾國家圖書館所蔵の『全唐詩稿本』も、これと同じ。ただ、第二句は「海月閑」に作る。）次に、②について見てみよう。この系列で最も早い文献は、盛唐の殷璠の『河岳英靈集』であり、題名および詩句は次のようになっている。

塞上聞笛

塞上にて笛を聞く

胡人羌笛戍樓間 胡人の羌笛 戍樓の間
樓上蕭條明月閑 樓上 蕭條として 明月閑かなり
借問梅花何處落 借問す 梅花 何れの処よりか落つ
風吹一夜滿關山 風吹きて 一夜 関山に満つ

なお、晩唐の韋穀の『才調集』巻一には、中唐の宋済の作としてこの詩を載せ、第一句の「胡人」を「胡兒」に、二句の「明月閑」を「海月閑」に作る。⁽⁸⁾しかし、『国秀集』『河岳英靈集』をはじめとして、諸本いずれもが高適の作としており、『才調集』の誤りと見て間違いないであろう。⁽⁹⁾

最後に③の系統であるが、『唐詩選』から遡って、早くは宋初の『文苑英華』⁽¹⁰⁾、あるいは南宋の洪邁の『唐人万首絶句』⁽¹¹⁾は、いずれもこの系列に属する。なお、『高常侍集』は、四部叢刊所影の明活字本、四庫全書が採録する汲古閣影宋本など、管見の諸本はいずれもこの系列に属している。⁽¹²⁾

この他、注目すべき資料として、敦煌写本の残巻を忘れてはならない。⁽¹³⁾パリ国立図書館所蔵のベリオ二五六七、二五五二号写本は、所謂『唐人選唐詩殘巻』として知られるが、その二五五二号に高適の作として、右の③系の詩句と全く同じ内容でこの詩が収められている。『唐人選唐詩』の編選年代は、天宝十二載⁽¹⁴⁾(七五三)から順宗即位の永貞元年(八〇五)までの間と推定され、盛唐末あるいは中唐の貴重な資料である。また、ベリオ二五五五号写本は『敦煌唐人詩集殘巻』の名で呼ばれ、中唐前期の編と推定されるが、⁽¹⁵⁾ここにもこの作品が見え(作者および題名の記載はなし)、詩句は二五五二号と一致する。⁽¹⁶⁾

字句の異同は以上の通りである。一見したところかなり大きな、しかも煩雑に感じられる相違ではあるけれども、こうして整理してみると、そこから興味深い事実が浮かび上がってくる。それは、単に三系統にまとめられるだけでなく、さらに三者相互について、異同の生じた筋道が意外にたどりやすい(言葉を換えれば、それが推敲の跡として読み取れる)ことである。そこで次に、この点について検討を加えてみたい。

三

前節で整理分類した三系統の字句の異同は、相互にどのように関連づけられるであろうか。三系統の詩を載せる資料は、①系統の『国秀集』が天宝三年⁽¹⁷⁾、②系統の『河岳英靈集』が天宝十一年⁽¹⁸⁾、③系統の敦煌資料が、盛唐末あるいは中唐前期の成書と推定され、詩集の編集時期にはさほどの開きがない。したがって三者の異同の先後関係については、所載の詩集の資料としての新旧よりも、むしろ作品の内容自体の検討を通じて明らかにしてゆくべきと考えられる。

まず①系統と②系統に注目してみよう。左に両者をもう一度並べて挙げてみる。

- ① 胡人吹笛成樓間、樓上蕭條海月閑。
借問落梅凡幾曲、從風一夜滿關山。
- ② 胡人羌笛戍樓間、樓上蕭條明月閑。
借問梅花何處落、風吹一夜滿關山。

前半一二句の「吹笛」と「羌笛」、「海月」と「明月」の微妙な差違については、ひとまず置くことにする。二首の相違のポイントはそこではなく、明らかに後半の二句にあると考えられるからである。①の「借問落梅凡幾曲、從風一夜滿關山。」では、「落梅」は、笛の曲としてそのまま直叙的に歌われている。これに対して②の

「借問梅花何處落、風吹一夜滿關山」では、「梅花落」の曲を散る花びらに見立て、そこに重層的なふくらみを持たせる技法が取り入れられている。また、①に歌われているのは、幾曲も吹かれ風に乘って関山に満ちてゆく笛の調べであり、そこを流れる時間はかなり幅のあるゆったりしたものといえる。これに対して②の描写は、そうした時間の緩やかな流れを表現から消し去り、「梅花落」の曲がふと呼び起こす連想に焦点を当てることによって、より凝縮された時間とアクセントを詩世界に生み出している。こうした差異を推敲という観点から考えれば、①に手が加えられて②の形となったことは、ほとんど疑問の余地がない。

次に、②系統と③系統。これも左にもう一度挙げる。

② 胡人羌笛成樓間、樓上蕭條明月閑。

借問梅花何處落、風吹一夜滿關山。

③ 雪淨胡天牧馬還、月明羌笛成樓間。

借問梅花何處落、風吹一夜滿關山。

後半二句に異同はなく、前半の二句が問題となるが、これに関しても推敲の過程は容易に想像できよう。②の「胡人羌笛成樓間、樓上蕭條明月閑」の場合、一読して気づくのは詩語の重複と、それに伴う情景描写のふくらみの乏しさである。第一句の「胡」と「羌」は、いずれも異民族を指す言葉であって、絶句という短い詩型の一句中に併存させるよりは、別の要素を歌い込むべきであろう。次

に、第一句の「成樓間」と第二句の「樓上」も同様の欠点を持つ。さらに細かい点を言えば、第一句末の「間」と第二句末の「閑」は、ここでは異なる意味で用いられているとはいえず、「しずか」「のどか」の意味では通用される文字であり、字形も相似する。絶句の韻字として連用されるのは、やはり気になるところである。これに対して③は、②が残していたこのような未彫琢の部分に、見事一刀を加えたものとみて間違いない。②が前半二句を費やして歌おうとした内容は、③の第二句「月明羌笛成樓間」に、凝縮された形ですべて描出される。そして、これによって生じた一句七字のスペースに、美しく雄大な北方の異域の冬景色が「雪淨胡天牧馬還」と詠い込まれ、それによって③の作品世界は、②よりもはるかに洗練された詩情豊かな情景句を備えるに至っているのである。

以上の考察によって、高適のこの絶句は①が原型であり、これに手が加わって②の形となり、さらに推敲されて③となったことが明らかになった。①のやや粗削りで素朴さの残る作品が、抒情詩としての美しさ・洗練された表現を追求して、より完成された形へと向かう過程がここに明示されているのであり、そうした資料としての高い価値はあらためて注目されるべきであろう。

さて、こうしてこの作品の①から③に至る推敲の過程が確認されたとする、続いて起こる疑問は、この推敲加筆が誰によってなされたか（高適自身によるものか否か）であろう。難しい問題ではあるが、次にこの点について触れておくことにしたい。

四

「和王七度玉門關上吹笛」から「塞上聽吹笛」への加筆推敲が、高適自身によるものか否かについては、決定的な証拠がなく判断が難しい。ただ、①を載せる『国秀集』、②を載せる『河岳英靈集』が、いずれも高適の生前に編纂された詩集であることを考えると、①の「和王七度玉門關上吹笛」から②の「塞上聞笛」への加筆は、高適自身によってなされた可能性が高いように思われる。

では②から③の過程についてはどうであろうか。

②に加えられた推敲によって、③の「塞上聽吹笛」は、一段と洗練された高い完成度を持つに至った。しかし、冒頭で述べたようにこの絶句の美しさは、彼の他の詩作品とは傾向を異にするように感じられる。

任侠の世界に身を投じたこともある豪強な性格と、出世前の長い不遇の時代を反映して、高適の詩は、慷慨の気を帯びた思想性と重い現実感、男性的な骨格の太い抒情、豪放かつ悲壮な歌いぶりを特徴とする。詩型においては五言七言の古詩を得意とし、絶句の数は少ない。今、辺塞詩の代表作の中から比較的短い作品を挙げるとすれば、たとえば、「薊門」五首の連作などがある。左にその第一首と二首を引用する。

薊門逢古老
獨立思氛氲

けいも
獨り立てば思ひは氣氲たり

一身既零丁
頭鬢白紛紛
歟庸今已矣
不識霍將軍

一身 既に零丁
頭鬢 白紛々たり
歟庸 今は已みぬ
識らず 霍將軍を

（「薊門」五首之一）

漢家能用武
開拓窮異域
戍卒厭糟糠
降胡飽衣食
關亭試一望
吾欲涕沾臆

漢家 能く武を用い
開拓して異域を窮む
戍卒は糟糠に厭けるに
降胡は衣食に飽く
關亭 試みに一望すれば
吾 涕を沾さんと欲す

（「薊門」五首之二）

こうした古体の詩に限らず、七言絶句の形式による作品もまた、「塞上聽吹笛」とは詩風を異にしている。たとえば、同じく辺塞をテーマとし、『唐詩選』にも収録される「九曲詞」（三首連作の第三首）は、次のようにうたわれる。

鐵騎橫行鐵嶺頭
西看邏逆取封侯
青海只今將飲馬
黃河不用更防秋

鐵騎 橫行す 鐵嶺の頭
西のかた邏逆を看て 封侯を取らん
青海 只今 將に馬に飲わんとす
黃河 用いず 更に秋を防ぐを

主戦的な勇壮な感情をうたう点、先の古体詩とは逆になるが、骨格の太い男性的な抒情には、明らかに共通するものがある。これに對して「塞上聽吹笛」は、むしろ洗練された抒情の優美さがその特徴である。

こうした異質性を重視するならば、高適以外の人物による加筆の可能性が膨らんでくることになる。しかし、ここで忘れてはならないのが、③系統の詩を収録する敦煌資料の存在であろう。すでに述べたように、この敦煌写本は盛唐末あるいは中唐前期の書写と推定され、したがって、代宗永泰元年（七六五）の高適の死去以前に、この詩集が編纂された可能性も高い。となると、②から③への推敲加筆が別人の手になるものか否かは、再び微妙な問題になってくる。「和王七度玉門關上吹笛」から「塞上聽吹笛」への加筆が誰によってなされたかについては、これ以上先に論を進めることが難しく、本節の考察はここで踏み留まらざるを得ない。ただ、正直なところを言えば、私はこの問題にそれほど執着する気持ちはない。むしろ、加筆が誰の手になるかにかかわらず、高適のこの絶句の①から③に至る推敲が、文学史的に極めて興味深い方向性を示している点に関心を持つ。そこで、最後にこうした視点から「塞上聽吹笛」を論じて、小稿の結びとすることにしたい。

五

①から③に至る推敲をへて、「塞上聽吹笛」として完成した高適

(22)
の絶句を見る時、私はその詩世界が、例えば次のような辺塞詩と近似していることに興味を引かれる。

夜上受降城聞笛	夜に受降城に上りて笛を聞く
回樂峯前沙似雪	回樂峯前 沙は雪に似
受降城外月如霜	受降城外 月は霜の如し
不知何處吹蘆管	知らず 何処にか蘆管を吹く
一夜征人盡望鄉	一夜 征人 尽く郷を望む

この絶句は、中唐初の大暦（七六六～七七九）期を代表する辺塞詩人、李益の作品である。回樂峯付近の沙漠の、雪景色にも似た美しい夜景と、それを照らす白い月の光。そして、どこからともなく聞こえてくる笛の音色に、郷愁に駆られ、一夜ごとくその方を望みやる兵士達——高適の「塞上聽吹笛」との間に、翻案あるいは引用といった直接的な影響関係が認められるわけではないが、情景の設定は極めてよく似ており、作品が目指す優美で感傷的な抒情世界の描出にも、明らかに共通するものが見られる。

中唐大暦期の詩人達の作品は、盛唐詩の雄渾・豪放な世界を失いはしたものの、近体詩の抒情に一層洗練の度を加え、特に絶句においては、時間の流れのなから印象的なシーンを鮮やかに切り取った、こうした絵画的あるいは映像的ともいうべき傑作が多い。(23)そして、この点を念頭に置かなければ、二篇の詩の近似性が意味するところは決して小さくないように思われる。

盛唐を代表する辺塞詩人の作品に後人の推敲が加えられ、中唐を代表する辺塞詩の抒情美に近づいていったとすれば、あるいは、盛唐を代表する辺塞詩人が自己の抒情的な小品に手を加え、その結果完成した作品が、図らずも中唐辺塞詩の代表的作品の抒情美に歩み寄ったとすれば、私たちはそこに、単なる一作品の推敲の過程以上のものを見ることができないのではないだろうか。つまり、この加筆の跡には、盛唐の後期から中唐初にかけて、詩人達の美意識が辿ろうとした一つの方向が垣間見られるように思われるのである。

要するに高適のこの作品には、盛唐の抒情詩がさらに洗練された抒情美を求めた場合、どのような詩世界にたどり着くかという、文学史的な問題の解答の一つが、鮮明な形で表わされていると考えられるのである。(そして、もしこの推敲加筆が全て高適自身の手によってなされたとすれば、中唐的な詩風とは異質だった彼の創作活動においてさえ、抒情美の追求のなかでこのような結果がもたらされたという、その意外性こそが一層重要な意味を持つ。)盛唐詩から中唐詩への変遷は、さまざまな背景・要因を含めて多角的に論じられる必要があるが、こうした詩史の内的展開の側面からの考察も、当然のことながら忘れられてはならない。高適の「塞上聽吹笛」は、そのことを私たちに教えてくれる、貴重な資料とも言えるのである。

〈注〉

(1) 高光復『高適岑參詩訳釈』(黒竜江人民出版社、一九八四)は、「雪浄」を春が近づいて雪がとけ消える意味に取る(一二五・六頁)が、これは正しくない。管見の限りでは、「雪浄」をそうした意味に用いた例は、少なくとも盛唐以前の詩には見当たらない。王維の「冬夜寓直麟閣」詩(一に宋之問の作とも言う)の「廣庭憐雪浄、深屋喜爐温」、張叔良「長至上公獻壽」詩の「休光連雪浄、瑞氣雜爐香」など、いずれも「浄」は「きよらか」の意味である。なお、『佩文韻府』の「雪浄」の項には、王維の「觀獵」の詩が「草枯鷹眼疾、雪浄馬蹄輕」として引かれており、これならば「雪がきえる」の意味にも取れようが、実は『韻府』の引用の誤り。宋蜀刻本(北京図書館蔵)・宋刻本(静嘉堂文庫蔵)を始めとする王維の詩集の諸本、『極玄集』『又玄集』『唐詩記事』『樂府詩集』『唐詩品彙』『全唐詩』などに収められる「觀獵」のいずれもが、「雪盡馬蹄輕」に作る。

(2) 『樂府詩集』卷二四・横吹曲辞に漢横吹曲として「梅花落」が見える。題辞の注には、「梅花落、本笛中曲也。按唐大角曲亦有大單于・小單于・大梅花・小梅花等曲、今其聲猶有存者」とあり、唐代にはまた、「大梅花」「小梅花」の曲もあったことがわかる。なお、「梅花落」については、岩城秀夫『漢詩美の世界』(人文書院、一九九七)所載の「散りしく梅の花」に詳しい論考がある。

(3) 『唐代の辺塞詩』(尚学図書「漢文研究シリーズ9」、一九八

四) 所載の市川桃子「高適・岑参の辺塞詩」の解釈(四三頁)による。冒頭の「雪淨」の雪は、この第三句の「梅花」と暗に呼応しているように思われる。

(4) 卷下所収。『国秀集』の版本は、四部叢刊本および『唐人選唐詩(十種)』(中華書局、一九五八)・『唐人選唐詩新編』(陝西人民教育出版社、一九九六)によった。

(5) 岑仲勉『唐人行第錄』(中華書局、一九六二)は、この王七を王之涣とし、彼の著名な七絶「涼州詞」が「塞上聽吹笛」と同韻で詠われているところから、両者を唱和の作と見なす(一〇頁)。興味深い説ではあるが、『国秀集』が「王七」ではなく「王七度」としている点に、なお問題を残す。

(6) 『全唐詩』の版本は、一九七九年、中華書局出版の活字本によった。なお『全唐詩』では、題辭および本文の四か所に、字句の異同についての注記が付されているが、いずれもこの後に示す『河岳英靈集』『文苑英華』所載の詩との校勘を記したものである。

(7) 卷上所収。『河岳英靈集』の版本は、四部叢刊本および『唐人選唐詩(十種)』(前掲)・『唐人選唐詩新編』(前掲)によった。

(8) 卷一所収。『才調集』の版本は、四部叢刊本および『唐人選唐詩(十種)』(前掲)・『唐人選唐詩新編』(前掲)によった。なお、第二句の「海月閑」は、『唐人選唐詩』本では「海

月閑」。

(9) 『全唐詩』も卷四七二に、宋済の作として重ねてこの詩を挙げているが、無批判に『才調集』に拠ったものであろう。岑仲勉『唐人行第錄』(前掲)の考証(一〇頁)および『唐人選唐詩新編』(前掲)の注記(一五七・七二四頁)も、この作品を高適の作とする。

(10) 『文苑英華』の版本は、一九六六年、中華書局出版の影印本によった。高適のこの作品を載せる卷二二二は、明刊本を底本とする影印である。

(11) 卷十二所収。『万首唐人絶句』は、一九五五年、文学古籍刊行社影印の明・嘉靖刊本、および明・万曆刊本を底本とした郭松林主編『万首唐人絶句校註集評』(山西人民出版社、一九九一)によった。

(12) 高適の詩集の諸本に關しては、ほかに阮廷瑜『修訂再版高常侍詩校注』(国立編訳館中華叢書編審委員会、一九七〇)、劉開揚『高適詩集編年箋注』(中華書局、一九八二)、孫欽善『高適集校注』(上海古籍出版社、一九八四)と、その校記を参照した。なお、劉氏が四庫全書本所載のこの作品を、①系列としているのは誤り。

(13) 柴劍虹『敦煌唐人詩文選集殘卷(伯二五五五)補錄』(文学遺產一九八三年第四期)および黄永武・施淑婷『敦煌の唐詩統編』(文史哲出版社、一九八九)第三章、第七章に詳しい紹介がある。

(14) 『敦煌的唐詩統編』(前掲)第三章「敦煌写本高適詩叙録」の考証による。

(15) 『敦煌的唐詩統編』(前掲)は、「非在盛唐、即在盛唐後不久」とする。しかし、高崇『敦煌唐人詩集殘卷考釈』(寧夏人民出版社、一九八二)の考証によれば、この詩集が収める吐蕃の捕虜となった兵士の作品には、大曆(七六六～七七九)・建中(七八〇～七八三)の作と推定できるものが含まれる。

(16) ただ、冒頭の「雪淨」を「雪靜」に作る。しかしこれは、「淨」「靜」の字形・発音の類似からきた誤りであろう。

(17) 『国秀集』の成立年に関しては議論があるが、『唐人選唐詩新編』(前掲)の「前記」の説(二一〇～二一一頁)に従う。

(18) 『河岳英靈集』の成立年に関しても諸説があるが、『唐人選唐詩新編』(前掲)の「前記」の説(二〇二頁)に従う。

(19) 詩的効果について言えば、①に対して②は、第一句の「羌笛」に「胡人」と呼応させた異域のイメージの強調が見られること、第二句の「明月」に、①の「海月」では希薄だった光の明るさの要素の導入(「海月」の「海」は「晦」の暗いイメージにも通じる)が見られること、等が指摘できる。しかし、こうした差異だけからでは、両者の先後関係を押えることは難しい。この問題を検討しようとするならば、やはり後半の第三・四句の違いに注目すべきであろう。

もっとも、後の③の前半二句との関連性から考えるならば、『雪淨胡天牧馬還 月明羌笛戍樓間』が、①の「胡人吹笛戍樓

間、樓上蕭條海月閑」からではなく、②の「胡人羌笛戍樓間、樓上蕭條明月閑」をもとに生み出されていることは、『羌笛』「明月(月明)」の語の使用から明らかである。

(20) なお、結句の「從風」と「風吹」も、わずかな違いではあるが、見逃されてはならない。①の「從風」の場合、笛の曲が風上から伝えられて来ることを想起させ、第三句をそのまま受ける従属的な表現となっている。文法的には主語は第三句の笛の曲であり、「從風」はあくまでも「滿關山」を修飾し、補足説明する役割で用いられているのである。これに対して②の「風吹」は、転句の「何處落」との呼応関係から、「風に從つて(風上から)」という方向性が表面上消され、「(気づけば)風が吹いて」という一つの出来事としての意味を強めて用いられる形となっている。その結果、前句とはいったん途切れるこの独立性によって、かすかな意外性を含んだアクセントが、後半二句につけ加えられることになる。

(21) たとえば『河岳英靈集』巻上の高適の小伝は、「性拓落、不拘小節。恥預常科、隱迹博徒、才名自遠」と記す。

(22) もっとも、平仄の面から言えば、①②系列が近体絶句の平仄式に則っているのに対し、『塞上聽吹笛』は、第二句と三句の平仄を対にして粘しない、いわゆる齊梁体(江左体)の古い形を取っている。しかし、これは措辞・表現上の必要性から変法に従ったもので、不完全な欠点という訳ではない。盛唐期の絶句には、こうした例はしばしば見られ、例えば先に挙げた「九

曲詞」も『唐詩選』所収の名作であるが、同じ平仄律によって詠われている。

(23)

印象的なワン・シーンをとらえた映像的作品という点では、同じ李益に「從軍北征」と題する次の詩がある。この七言絶句は、「夜上受降城聞笛」の後半二句を、さらに効果的な一瞬に凝縮させたものといえよう。

天山雪後海風寒

天山 雪後海 風寒く

横笛偏吹行路難

横笛 偏えに吹く 行路難

磧裏征人三十萬

磧裏の征人 三十万

一時回首月中看

一時に首を回らせて月中に看る

また大曆十才子の一人、盧綸の次の五言絶句、「和張僕射塞下曲」も同様な特徴を持つ作品といえる。

月黑雁飛高

月黒く雁の飛ぶこと高く

單于遠遁逃

單于 遠く遁逃す

欲將輕騎逐

輕騎を將って逐わんと欲すれば

大雪滿弓刀

大雪 弓刀に滿つ

高適の「塞上聽吹笛」に流れる美意識は、これらの詩世界とも意外に近い距離にあると考えられるのである。